好きに打てばいいさ

yu-min

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きに打てばいいさ

【Ｎコード】
Ｎ１１０３Ｗ

【作者名】
ｙｕ－ｍｉｎ

【あらすじ】
くだらない理由でプロ雀士を引退した古城新。そんな男が自由に気楽に過ごす物語。
※麻雀のルールは知らないと厳しいかもです。あと、アカギ的戦略（？）はいってます、こちらは知らなくても全然大丈夫です。

第1話　凹ませればいいさ（前書き）

基本的に
マンズは一二三四五六七八九
ピンズは？？？？？？？？？
ソウズは１２３４５６７８９
字牌は東南西北白發中
で表記します。

キャラの口調が不安。
うろ覚えだし……まぁ、多めに見てくださいね。

第1話　凹ませればいいさ

とある一室。
時間はもう昼だというのに、一人の男はまだベットの中にいた。
すると、男の携帯が鳴り始め、ベットがもぞもぞと動く。
「んあ？」
男は目を閉じたまま電話にでる。
『新（あらた）？やっほ～』
「……久か？」
『だいせいか～い。てか、携帯の着信でわかるでしょ？』
「用件は？」
『あなたの声が聞きたくて……／／』
「話を聞いてほしけりゃ、冗談もほどほどにするんだな」
『冗談じゃないんだけどなぁ。じゃあ、お願い聞いてくれない？』
「”じゃあ”の意味がわからんが、なんだ？」

久が新にお願いとやらを説明する。

「俺と靖子で、その1年生を徹底的に負かせってか……靖子一人で十分だろ」

『いやぁ、やるなら徹底的にボコボコにしてほしいのよ』

「俺、今は高校のコーチやってんだが？」

『麻雀打つだけなんだから、気にしない気にしない』

「仕方ねぇな。何処に行けばいい？」

『”Ｒｏｏｆ－ｔｏｐ”って喫茶店なんだけど、わかる？』

「なんとかしてたどり着こう」

『じゃあ、よろしくね～』

電話が切れ、新は次に電話をかけようとするが……

「面倒だな、一斉送信でいいだろ」

そう呟いて、新は携帯でメールを作成する。

【件名：今日行けねぇ
本文：各自好きに打ってよし】

新はこれでいいかとメールを送信。

「さて、久の言ってた喫茶店にでも行くか」

早い気もするが、と思いながらも新は身嗜みを整える。

すると、早速メールの返信がきた。

新着3件

【ｆｒｏｍ：東横　桃子
件名：そりゃないっす！
本文：なんで来れないんっすか？まさか女性絡みっすか？デートっすか？】

【ｆｒｏｍ：蒲原　智美
件名：ワハハ
本文：これはゆみとモモが残念がるだろうなぁ】

【ｆｒｏｍ：加治木　ゆみ
件名：珍しいな
本文：わかった。……なんで今日来れないか、聞いてもいいか？】

まともなメールは加治木だけ……に見えるが、新はそうは思っていなかった。

「あいつら……今、授業中だろうが」

新は高校の時間を把握しているため、この返信者達が現在授業中だとわかっていた。

てか、こいつら年上には敬語を使えと思わなくもないが、気にしないことにした。

「まぁいい。行くとしよう」

だからと言って、新は特には気にしない。
自分が教師という立場でもないし、なにによりどうでもよかった。
新はＲｏｏｆ－ｔｏｐに向かうべく、外への扉を開く。

ちなみに返信はしなかった。

視点　和

私と宮永さんは今、部長の指示でＲｏｏｆ－ｔｏｐという喫茶店に来て、染谷先輩に流されるままメイド服（？）に着替えて接客をしてると、お客さんと麻雀を打つことになった。

「次はこっちのお嬢ちゃんがトップかぁ」

半荘を2回で、私と宮永さんが1回づつトップをとった。

「じゃ、俺はキリのいいとこで終わりにするわ」

４人いた面子が3人に減った。
この後はどうするのでしょうか？

「いらっしゃい」

「あら、今日のバイトは可愛らしいわね」
一人の女性が入店した。
この人が入ってきてから急に宮永さんが震えている。
「よろしく。さぁ、始めようか」
「あ～、ちょっと待ってくれ」
さらにもう一人、男の人が入店してきた。
「おっさん、すまないけど席譲ってくれないか？」
「ん？ああ、構わないよ」
「すまないな」
男の人はおじさんの代わりに席に着いた。
「なっ！？新！！お前、今まで」
「それは後でな」
女性が新さんという男の人の顔を見るなり、声を荒らげるが嗜められる。
「さぁ、やろうか」

視点　染谷

南４局オーラス
ドラは５

東家　古城　新　１２７００
南家　原村　和　４３３００
西家　藤田　靖子　２５５００
北家　宮永　咲　１８５００

８巡目

さて、藤田さんの手は……

八八？？？？？２２２２３４

ピンズの？、？、？待ち。

さすがの藤田さんもこの状況は厳しいか。

リーチをかけて、うまく裏ドラがのらんと和をまくるのは無理。
それにしても……
「ふわぁ……」
この人、やる気あるんだろか？
さっきから振込みすぎや。
親はこの人じゃが、一発で和をめくるには跳満を直撃させるしかない。
今はどんな手牌……そう思い、古城さんの後ろに回る。
一一一五五五七八九九中中中
きっかし、逆転手を張っとる。
混一色、中、三暗刻。
でも捨て牌は誰がどう見ても染め手だとわかる。
そうなると、和は振り込まんやろ。
そうこうしてる内に１２巡目。
咲から当たり牌の六萬がでた。
親っ跳ねで１８０００、ギリギリ咲も跳ばんし、トップと差をだいぶ詰めたな。

そんなことを考えとると、古城さんはワシが言うと思っていた言葉と違うことを言った。

「チー」

なんでチー！？

ワシの考えを他所に古城さんは鳴き、九萬を切った……あれ？

「あの……すみません」

「ん？なに？」

「六萬鳴き九萬切り、そういう喰い替えは……」

「……あぁ！悪い悪い」

古城さんは鳴いた六萬を咲の河に戻し、晒した七、八萬と捨てた九満を手中に戻して、改めてツモ。

その牌をツモ切り。

そして、和が六萬を出した。

「ロン」

「え？」

一一一五五五七八九九中中中　六

「混一色、中、三暗刻。親っ跳ね、１８０００。まくったな」

古城　新　３０７００
藤田　靖子　２５５００
原村　和　２３３００
宮永　咲　１８５００

なるほど、ようやっとわかったわ。

勘違いに見せた鳴きミス、これ自体が罠なんじゃ。
まだ鳴きが入るんじゃから、テンパイではない。少なくとも、鳴いた六萬と捨てた九萬は安全に見える。

デジタル打ちの和には理解できん……いや、誰にも理解できんか。
こんな打ちまわしは。

結局、その後も半荘を４回ほどやり、古城さんは最初の１回だけ、藤田さんが４回連続でトップになった。

視点　新

「これで、私の４連続トップね」

原村という娘が、こいつ何者？的な顔をしている。

「藤田さんはプロ雀士なんじゃ」

その言葉で咲という娘が、負けて当然的な物言いをし、原村がその発言に怒る。

靖子はそんな二人の状況を無視して、話し始めた。

「そうそう、去年プロアマの親善試合があってね。半荘１８回を戦って私は3位だった。けど、優勝したのは当時１５歳の高校生、龍門渕高校の天江衣」

それを聞いて二人は驚く。

そういえば、去年の県予選の優勝校だったな。

あ～、衣が出てくんのか。まったく考えてなかったな。

対策でも考えるかね、教え子たちのために。

「あなたたちも県予選にでるの？それは残念ね。わかってると思うけど、絶対天江衣に勝てないわ。あなたたち」

なんか話が進んでた。
靖子の言葉で二人がこれでもかってくらい凹んでる。
やっぱ、俺いらなかったんじゃねぇか？

そして、見事二人をボコボコにした俺たちは店を出て、夜の道を歩いていた。
ん？たち？
「おい、新」
靖子が後ろからついてきていた。
「ん？」
「お前が突然プロを引退した理由、聞かせてもらうぞ」
靖子の言葉でわかるだろう。
俺は少し前までプロ雀士だった。

「別に隠したいわけじゃないから構わんが、気になるものなのか？」
後ろを振り返って聞く。
「ああ、去年の親善試合でもお前は2位で、衣と同じ卓でトップもとっただろ。それに今日のお前を見る限り、なにも衰えていなかった」
「そりゃそうだろう。俺が引退した理由は取材やら何やらが面倒だからだしな」
「は？」
靖子は心底呆れた声を出す。
「まぁ、そんな感じだ」
呆然としている靖子は立ち止まったまま。
待つ理由もないので、俺は先に歩く。
帰って、飯食って風呂入って寝よう。
そう思いながら、現在の時間を確認するべく、携帯を開く。
新着3件
【ｆｒｏｍ：東横　桃子

件名：明日は絶対来るっすよ

本文：おやすみっす】

【ｆｒｏｍ：加治木　ゆみ

件名：明日は大丈夫だよな？

本文：今日はとりあえず部員で打っただけだ。一応報告しておく】

【ｆｒｏｍ：竹井　久

件名：今日はありがと

本文：随分とコテンパンにしてくれたわね。これでこの二人はもっと強くなるわ、ありがとね】

ふむ、明日は顔を出すか……気分が乗れば。

そんな、明日の予定を組みつつ、俺は帰路へとついた。

第1話　凹ませればいいさ（後書き）

新がどこの高校のコーチかわかりましたよね？

まぁ、そのへんの絡みは次話に……

第2話　賞品をつければいいさ（前書き）

ツモやあがり牌は手牌の右側です。
鳴いた牌は手牌の少し右側です。

例えば

二二四五１２３４５６７８９　六

一二三九九？？？１２　東東東　３

って感じになります。

第2話　賞品をつければいいさ

視点　古城新

鶴賀学園高等部麻雀部。
俺は現在、ここのコーチを引き受けてる。

「……すんすん／／」

「……」

そして、今はその鶴賀学園の麻雀部室に向かっているんだが……。

「……すんすん……ふぎゃ！！」

さっきから後ろをぴったりついてくる娘の頭を鷲掴みにする。

「奇遇っすね、新さん。部室に行くんすよね？一緒に行くっすよ」

「なに今偶然会ったみたいな言い回しをしてんだ、モモ」

「あれ？気づいてたんっすか？」

「気づいてなかったら、後ろを振り向かんわ」

こいつは東横桃子、通称モモ。
影が半端なく薄い。
隣にいても気付かないほど影が薄いらしい。
”らしい”ってのは、俺ははっきりくっきりこいつの存在に気付くから知らんのだ。
だから最初に話しかけたときは驚かれた。
そして、俺は事情を聞いて驚いた。
「そんなとんでも能力があるなら麻雀部に入れ、人数が少ねぇんだ」
って言ったら、こいつは二つ返事で頷いた。
それからというもの、妙に懐かれてしまった。

「で、俺の後ろをぴったりストーキングしてた理由は？」
「新さんの匂いを嗅いでたっす。なんかドキドキしたっす」
「俺にいつ気付かれるか、スリル的なドキドキだと思っておこう」
そう言って、部室へと向かう。
「違うんすけどね。……ところで今日は何をするんすか？」
「睦月以外の3人に卓を囲ってもらう」
「新さんと他の二人はその間なにを？」
「睦月にはネット麻雀でもやってもらう。佳織はルールブックを読

ませる、何もわからんなら仕方ない。俺はお前らの卓に混ざる」
やっと着いた部室に入る。
「あー、やっと来たなー」
こいつは蒲原智美、一応部長だ。
ゆみの方が部長の風格があるが、こいつが部長だ。
「新、昨日は何故来れなかったんだ？」
加治木ゆみ。
俺がここのコーチを引き受けた原因の１つだ。
そして、この部の中では一番強い。
「その前にお前らは俺に敬語を使うという考えはないのか？」
「ワハハ。誰にも私らは止められないのだ」
まったくもって意味不明だ。
「ふぅ。あっ、新さん来てたんですか」
椅子をくるりと回してこっちを向いたのは津山睦月。
今はネット麻雀をしてたみたいだな。
「睦月、今の結果は？」
「３２７００で２位です」

「何回振り込んだ？」

「さ、３回ほど。内１回は満貫を」

だいたい失った点が１００００ってところか。
で、１８０００をもぎ取った。

「佳織」

「は、はい！」

妹尾佳織。
つい最近、智美の勧誘によって入部した素人。

「ほれ、新しいルールブックだ。今のよりわかりやすいだろ」

「あ、ありがとうございます」

佳織に本を渡して、睦月の方を向く。

「睦月、お前は引き続きネット麻雀だ。……そうだな、なんかルールでもつけるか」

「ルールですか？」

俺が付け加えたルールは以下の３つ。
1．必ずトップを取ること。
2．振り込んだ点数×２＋ツモによる支払い＜自分が上がった点数にすること。
3．跳満以上を振った場合、それ以降振ってはいけない。

「結局は振んないで勝てってことだ」

「や、やってみます」

「残りは卓を囲んで始めるぞ。準備しろ」

俺たちは場決めをし、椅子に座っていく。

そうだ。

ただ打つだけじゃ、つまらんな……ふむ、こうしよう。

「この半荘、トップになった奴にはこいつをやろう」

視点　蒲原智美

「この半荘、トップになった奴にはこいつをやろう」

新が懐から取り出したのは。

「そ、それは！プロ麻雀せんべえのスターカード、”古城新”！！」
驚きの声をあげたのはやっぱり睦月。
集めてるからねぇ。

「新さんがプロを引退したことによって、元々手に入らなかったレアカードが、まったく世の中に出なくなり今となっては幻のカード！！」

オークションとかで売ったらすごく儲かるだろうなぁ。

「睦月は最初の半荘でさっきのルールをクリアしたらやる」

バッと、パソコンの前に座り始めた。
それだけで、どれほど欲しいのかわかるよ。

「じゃあ、俺らも始めるか」

ゆみちんとモモの雰囲気が変わった。
あのカードが欲しいのかぁ。理由は睦月とは違うんだろうなぁ。
絵柄も普段の新からはめったに見れない、キリッとした顔だ。

ま、私もとりにいくとしますか。
売れそうだし。

そして、場はもう
東４局
ドラは北

東　加治木　ゆみ　３４１００
南　東横　桃子　２０４００
西　蒲原　智美　２９２００
北　古城　新　１６３００

よりによって新の風がドラかぁ、全然あがってないから嫌な感じがするなぁ。

さて、配牌はっと。

三三四八九？？？４６７北北

ドラが対子で三向聴（サンシャンテン）、他家の様子を見ながら平和でも目指しますか。

八巡目。

おっ、入った入った。

三四七八九？？？６７８北北　？

ここはとりあえず打？ピン。二，五萬待ち。

六萬がくれば三色もつくし、平和ドラドラでもトップのゆみの親を蹴れるから、ダマテンでいいや。

そう考えてた矢先。

新が二萬を打った。

「ローン、平和ドラドラ。３９００」

これでゆみちんとは１０００点差。

モモもこの半荘で存在を消すのは無理だな、新が卓にいる時は何故かいつもよりモモの存在がわかるんだよなぁ。

「……やはりな」

ゆみちんが二枚の牌を見て、なんか納得してる。

ん？それは私のツモ牌か？

視点　加治木ゆみ

「……やはりな」

今の局、新が差し込んでなかったら、蒲原は跳満もしくは倍満をあがってた。

蒲原の次順のツモが六萬、そして次が二萬。
六萬を引いて、平和三色ドラドラのテンパイ。次順の二萬ツモでツモがついて跳満。
六萬を引いた時にリーチをかければ、リーチと一発を加えて倍満。

倍満の時、新が支払うのは４０００とさっきの３９００とあまり変わらないが、智美は＋１６０００、このあがりだけで新は蒲原に２００００点も差を開けられる。

つまり新は蒲原の手があがる前にわざと差し込んだ。

まったく、今もボケっとした顔をしてるが、頭の中では何を考えてるかわからんな。

南１局

ドラは?ピン

東　東横　桃子　２０４００
南　蒲原　智美　３３１００
西　古城　新　１２４００
北　加治木　ゆみ　３４１００

配牌
五七九?:?:?:?:?:?:７７７西發
悪くない。ドラ絡みの３面張(サンメンチャン)。
問題はここ、五七九。この急所を引けば、上がりの道が拡がる。

６巡目

「チー」

新が七萬を鳴き、五六七。
両面子を鳴くということはもう張ったか。
五七九?:?:?:?:?:?:７７７９　八
五萬切りで８，９ソウの変則二面待ち。
?ピンを引けば三色も見えるが、その時はドラの?ピンがでる。

新の捨て牌は
東九二白3？

張っているなら、3ソウの裏スジの4，7ソウ。
または？？？か？？？この形からの打？ピン、つまり？，？ピンか？，？ピンの確率が高い。

どの道、テンパイ気配の新にこの？ピンは切れない。
ならこの変則二面で待つのもアリだな。

「リーチ」

五萬を切り、リーチ宣言。

「残念だな。ロン」

声の主は新。

「タンヤオ、鳴き三色、ドラ1赤1。7700だ」

四六？？？2245６　七五六　五

「っ！？」

新のあけた牌を見て、私は驚いた。
何故この手を面前で進めない？

5巡目の新の手はこうだ

四五六六？？？？２２３４５６

新はこの手から３ソウを切り、次順に七萬を鳴き、打？ピン。

５順目の３ソウ切りは置いといて、誰が考えても６巡目の手牌で七萬を鳴いて、間五萬の悪形で待つのはありえない。

この手は面前で進めていく方が有利のはずだ。

そう考えると偶然ではない、これは私の五萬が溢れるのを狙ったとしか思えない打ち回し。

新、お前には何が見えている？

「さぁ、南２局だ。ここからはさっさといくぞ」

第3話　奢ってやるさ

視点　加治木ゆみ

「ささっと終わったな」

南2局、新が親の南3局、この二つで勝負は終わった。
南2局では新が4巡で1000点をツモり、最後は蒲原に親の三倍満を直撃させて跳ばした。

「てゆーか、たったの5巡で三倍満ってチートだよなぁ」

蒲原が「うあー」と言いながら、卓に突っ伏す。

「俺も三倍満をあがったのは1年ぶりだ」

新は火の点いていない煙草をくわえながら、背もたれに背中をあずける。
校内は禁煙…というか火気厳禁だ。

「没収っす」

モモが煙草を口から奪い取った。

「火は点けてないんだから、返してくれ。最近は値段も高くなって一本も惜しいんだ」

「ダメっす。これを機に禁煙するっす」

「善処しよう」

新はバッと椅子から立ち上がり、パッと煙草を取り返し、また口にくわえた。

「そういや、睦月どうだった？」

「う、振り込んだのは1回ですけど……」

「まったくあがってないのか」

「……はい」

ルールを意識しすぎて、相手が張ったように見えたら降りてたんだろう。

そのおかげで自分の手は伸びず、まったくあがれなかったのか。

「うぅ、新さんのカードがあれば第1弾はコンプリートなのに……」

津山は本気で欲しかったのか、四つん這いの状態で落ち込んでいる。

モモも隙あらば新の内ポケットに手を侵入させようとしている。

私は……まぁ、残念だが、新に正面から勝って手に入れるとしよう。

「睦月、俺はでるから卓に入れ。お前ら4人で打て」

「新さんは何をするんっすか？」

モモが新の内ポケットに手を伸ばしたが頭を掴まれ、椅子に座らされた。

「後ろで見てる」

始めろ始めろと、新が急かすので私達は場決めをして始めた。

視点　古城新

「今日はここまでだな。ま、半荘を４回もできたからよしとしよう」

４回中、ゆみが２回トップを取り、最後の半荘はモモがトップに取った。

「もうすぐ7時か……メシでも行くか、ついて来る奴は来てもいい

ぞ。奢るから」

「寿司がいいなぁ」

「焼肉がいいっす」

「行くのはファミレスだアホ共」

ぐちぐちと文句を言いながらも、行く気満々なモモと智美は支度を始めた。

他の3人も行く気らしく、親御さんに連絡している。

「さて、準備出来たな。行くぞ」

鶴賀学園の近くにあるファミレス。

「あっ、新さんだ！」

「え！？ホントだ！！」

「こっちで一緒に食べませんかー？」

ここはよく部活帰りの鶴賀の生徒が来ている。

「ワハハ、後輩諸君、悪いが新は私たちにご飯を奢るという使命があるのだ」

「使命ってほど重要ではないけどな。またの機会に誘ってくれ」

「「「はーい！」」」

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

「6人です」

「ろ、6人ですか？5人じゃなくて？」

ああ、普通の奴はモモの存在がわからなかったな。

「1人はあなたから見えないだけですから、気にしないで6人がけの席に案内してください」

「わ、わかりました。店内大変混み合っていますので、4人がけの席と2人がけの席でよろしいですか？席はすぐ隣なんですが……」

「いいですよ」

「では、こちらにどうぞ」

俺は案内された2人がけの席に座り、通路を挟んで4人がけの席がある。

4人がけの方には智美と睦月が既に座っており、残りの3人は通路のド真ん中に突っ立っていた。

「モモがこっちに座れ」
空いている俺の前の席を指で突く。
大方、誰が何処に座るかで牽制しあってたんだろうが、通路を塞いでは店側に迷惑なので俺が決める。
それでもこいつらは座らなかった。
「私は新に聞きたいことがある。だからモモ、代わってくれ」
「いくら先輩でもこれは譲れないっすね。私は、私を見失わない新さんに注文をとってもらわないといけないっすから」
「それくらい、通路を挟んでもできるだろ」
「あ、あの……私も新さんに質問が……」
「先輩だって、違う日に聞けばいいじゃないっすか」
「わ、私も……」
「今日じゃないといけないんだ」
「あの、聞いてk……」
「とにかくダメっす。新さんは私を指名したんっすから……」
「私も新さんと一緒の席がいいんですけど！！」

まったく話に入れなかった佳織の大声で二人の言い争いは終わった。
そのかわり、店中の人間の視線を浴びてるがな。
結局、智美と睦月には2人がけの席に移動してもらい。
4人がけの席に俺と、残った3人が座ることになった。
「うぅ／／うぅ／／」
佳織はさっきから顔を真っ赤にして唸っている。
とりあえず、さっさとメニューを選ばせ注文すること十数分。全員の食事が来た。
「さて、新。聞かせてもらうぞ」
パスタをフォークでくるくる絡ませながら、ゆみが話しかけてきた。
「何をだ？主語を付け足せ。それと、飯がくる前に聞いとけよ」
「新がはいった最初の半荘なんだが……」
俺の言葉は無視か？
「最後の三倍満も気になったんだが、それより南1局の七萬チー、これがいくら考えても理解できない」
「そうだな」
あの手は確かに面前で進めたほうが有利。
そんなことは誰の目から見ても明白だ。

それを崩してまで鳴いた俺が何を考えてそんなことをしたのか、知りたい気持ちもわからんではない。

こんな不合理な打ち方する奴なんてのは極僅かだ。

「世の中には意味のわからん奴がいる。例えば、確信を持って海底(ハイテイ)を和了る奴もいれば、モモみたいにマイナスの存在感が捨牌を巻き込んだりな」

「新も、その”意味のわからん奴”の一人だとでもいうのか？」

「俺の”七萬チー”、意味わかったか？」

今回だけじゃないけどな、俺が第3者いわく意味のわからんことをするのは。

ただ今回のあれは今までより、目立った感があったから、ゆみも気になったのだろう。

「とりあえず今は食え。見ろ、智美達を」

智美、モモ、睦月、佳織までもがもうデザートに手を出していた。

俺も自分の飯を食べ終えたので、食後のコーヒーを注文する。

そのとき俺の携帯が振動した。

ん？メールか。

珍しいな、こいつからメールがくるなんて。

こいつは基本的に電話だからな。

「どうしたんだ？新」

メールを読み終わり、ゆみに呼ばれた俺はいいことを思いついた。

「ゆみ、明日少し付き合え、行くところがある。学校の方には俺がうまく言っておく」

「まさかデートっすか！！？」

モモ、そんな大声だすな。ゆみ、お前は赤くなってんじゃない。

「知り合いのところに行くだけだ。なんか俺に会いたいとうるさいらしい」

「じゃあ、新さんだけ行けばいいんじゃないっすか？」

「いやまぁ、それもそうだが……ゆみにはいい勉強になると思ってな」

俺は元々教える側の人間じゃないからな。

口で教えるより、見て知ってもらう。

「わかった。蒲原」

「はいはい、ノートなー」

ゆみも行く気になったようだ。

今まで、これといって俺はゆみには何も教えてないしな。

モモ達には何回かアドバイスとかはしてきたが、こいつには必要なかった。
口で説明するには無理だからな、ゆみに必要なことは。
そんな状態の時にこのメール、ナイスタイミングとしか言えない。
何事も経験だ。

「１１８００円になります」
この値段をファミレスで聞くとは思いもしなかった。
てか、何を頼めばこんなに高く……ん？プレミアムステーキＤＸ”３５００円”プレミアムチョコパフェＤＸ”２５００円”。
犯人は智美だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1103w/

好きに打てばいいさ

2011年9月8日00時38分発行